

ダイバーシティ事業 国際共同研究PI養成プログラム
報告書

報告日：2019年9月24日

派遣者所属名	国際文化学研究科
派遣者氏名	石田圭子
研究タイトル	1920年代～1940年代における美学と政治の関係について～日独比較の観点から
研究目的	<p>日本とドイツにおける1920年代～1940年代はともに、民主主義・自由主義から全体主義へと政治体制が急激に変化していった時代であった。本研究はこうした時代の大きなうねりの中に飲み込まれた芸術もしくは表象一般が、政治的環境の劇的な変化からどのような影響を受けたかということ、日本とドイツの事例を比較対照しながら考察しようとするものである。なお本研究における具体的な考察対象は美術と映画、演劇である。共同研究者であるベルクマン氏は演劇分野を担当し、申請者が美術および映画の分野を担当する。日本とドイツはこの時期に台頭した「ファシズム」によって同様に文化が統制され、芸術が政治的プロパガンダの手段とされた。両国における作品は全体主義体制下で制作されたことによる共通の傾向を持つと同時に、それぞれの「ファシズム」の政治的傾向・文化統制の方針の違いによって、異なった傾向も持つと考えられる。本研究は、この時期の日本とドイツの作品を比較分析することを通して、そうした共通点と相違点を明らかにすることを試みる。また、それを明らかにすることから浮かび上がる両国の「ファシズム」のあり方及び政治と芸術ないし美学の関係性について考察する。</p>
研究報告	<p>派遣期間中を通して、研究に必要な文献の収集および文献の精読、研究成果発表のための準備を進め、7月に開催された国際学会で発表を行った。一方で、今後の国際共同研究を推進するためのネットワーク作りに力を注いだ。共同研究者のベルクマン氏とは月に一回面談し、研究内容の報告と意見の交換を行い、今後の共同研究について話し合いを行った。</p> <p>当初の予定としては戦時期の映画および美術について研究を進める予定であったが、半年間の研究滞在ということもあり、今回の派遣期間中にはドイツのファシズム期の美術に関する研究に集中的に取り組むことにした。また、そうした美術をより幅広い造形芸術という観点から総合的にとらえるために、ナチス時代の建築についての調査も行った。さらに、それらに関する理論的研究も同時に進めた。文献の収集は主にベルリン国立図書館で行った。また、Amazon.deも活用して関連書籍の収集に努めた。また、実物を確認する必要がある場合には現地調査を行った。</p> <p>報告者は派遣前から日本とドイツの戦時中美術について研究を進めていたが、日本のケーススタディに比べて、ドイツのケーススタディの方は十分に進められていなかった。しかし、今回の調査でドイツ国内における最新の研究動</p>

	<p>向を知り、現在進行中の研究にアクセスし、関連する書籍・論文・一次資料を収集することができた。</p> <p>その具体的内容としては、まず、ナチスが政権獲得後に開催した「大ドイツ美術展」に関する調査を行った。ナチスの美術政策として比較的よく知られている「退廃美術展」と比べ、この美術展の研究はこれまでとくに立ち遅れてきた。それはこの美術がナチスのプロパガンダに利用されたため、戦後のドイツにおいて研究が長らくタブーとされてきたためである。しかし、近年この美術展に関するデータベースが整備されて以来、この美術展に関するモノグラフや論文も現れており、それらを収集・精読することで知識をアップデートすることができた。また、大ドイツ美術展に展示された作品を実見し研究資料としての写真を撮るためにベルリンのドイツ歴史博物館を訪れた。さらに大ドイツ美術展開催のために建設され、現在も残っているHaus der Kunstを実見するためにミュンヘンを訪れた。</p> <p>さらに「退廃美術展」についての調査も同時に進めた。派遣期間中にベルリンの美術館で開催されていた「エミール・ノルデ展」を訪れ、その展示内容、カタログおよび講演内容から、これまでナチスの芸術政策の犠牲者として語られてきた退廃芸術家たちそれぞれの複雑な事情と「大ドイツ美術展」とも共通しうるプロパガンダ的要素を一部に含んでいたということを知ることができ、そこからプロパガンダ芸術とモダニズム芸術の線引きが単純にはなされないということが確認できた。また、ドイツ北部にあるエミール・ノルデ美術館を訪れて、退廃美術展のシンボルとみなされている<キリストの生涯>を実見し資料となる写真を撮影した。</p> <p>以上のようにドイツ戦時美術の研究を進める一方で、日独の美術を比較する共同研究の一環として、5月半ばベルリン自由大学で日本の戦時プロパガンダ美術、いわゆる「戦争画」について講演を行い、現地の研究者と意見交換を行った。</p> <p>また、以上の調査内容から得られた知見に基づき、日独ファシズムの表象を「崇高」という観点から比較考察する理論研究を進め、その成果を7月後半にベオグラードで開催された国際美学会で発表した。</p> <p>一方で今後の国際共同研究のネットワーク作りのために、5月にはベルリンの美術館（Hamburger Bahnhof）で開催されたエミール・ノルデ展と並行して行われカンファレンス Ästhetische Moderne und Nationalsozialismus（モダニズムとナチズム）に参加し、最新の研究動向に関する知識を得る傍ら、ナチズム下における美術を研究対象とする研究者との交流をはかり、知己を得た。</p> <p>また、報告者が5月に行った講演の際にベルリン自由大学日本学研究科のツァハマン（Urs Matthias Zachmann）教授と知己を得、その後数回面会の面会を通して研究内容について意見交換を行った。</p>
今後の研究の見通し	<p>今後も大ドイツ美術展ならびに退廃芸術展について研究を進め、今後も共同研究者のベルクマン氏と連携しながらドイツの戦時中の芸術と日本のそれと</p>

	を比較し、両者の類似点と相違点を明らかにしていく予定である。とくにドイツの戦争画と日本の戦争画の比較に集中的に取り組み、そこから日独ファシズムの性格の相違について考えたい。また、来年度開催する国際シンポジウムの準備を進めていく予定である。
研究成果の発表予定	来年度神戸大学にて国際シンポジウムを開催する予定である。仮タイトル：1920年代～1940年代日本における芸術と政治の関係について

海外派遣終了後の研究の進捗状況（2020年2月現在）

帰国後も共同研究者と連絡をとり、来年3月に開催する予定の国際シンポジウムについて打ち合わせを行っている。また、シンポジウムのテーマに関連する研究に取り組んでいる国際文化学研究科の教員および韓国の研究者にも協力を依頼し、シンポジウム案について協議を行っている。1月に韓国・釜山で開かれた国際シンポジウムでは、別の韓国の研究者にも同シンポジウムについて打診し、これからシンポジウムの詳細を固めたうえで参加を求める予定である。また、派遣期間中に執筆した論文を学会誌（『美学』）に投稿した（現在査読進行中）。

海外派遣終了後の研究の進捗状況（2021年3月現在）

今年度は国際共同研究期間の最終年にあたり、複数の海外研究者を招き「日本のファシズム-その美学／芸術と政治」というシンポジウムを本研究科の教員と共に開催する予定であった。その準備を昨年より進めていたが、コロナの状況下で参加者の渡航が困難かつ当研究科内の入学試験等学内行事が流動的となったため、対面／オンラインいずれの形式でも開催することが困難となった。以上の理由によりシンポジウム開催はやむなく中止することとなった。

しかし、今年度も引き続き派遣先の共同研究者とは常時コンタクトをとり、お互いの研究に関する情報交換を行った。そうして得られた情報および海外派遣中／派遣後に入手した資料に基づき、個人的にナチズムの美学と芸術に関する研究を進め、学会誌にそのテーマに関連する論文を投稿し、今年度の号に掲載された。現在もこのテーマで研究を継続しており、来年度6月には日本ドイツ学会でのフォーラムで発表を行う予定である。また論文も同時に執筆中であり、来年度中に学会誌等に投稿する予定である。